

3) 討論、結語

コーディネーター: 工藤由貴子(国際長寿センター-日本研究アドバイザー)

(工藤)

それではここで、発表者すべての方に壇上にお上がりいただきまして、残りの時間、パネル・ディスカッションということで、より深めていきたいと思えます。皆さんどうぞ、壇上の方にお上がりください。よろしくお願いいたします。



各国から非常に多岐にわたるいろいろなお話をいただきました。各国社会状況あるいは経済、非常に異なる社会での発表ですので、それぞれの高齢者介護、あるいはアルツハイマーを抱えた方の介護ということで、その有り様はたいへん多岐にわたっていたかと思えますけれども、各国の目指していく方向性というものには、お話を伺う中で一つの共通性が見えてきたように思います。これは、例えば個人という視点から介護を考えるのであれば、個人にとってはできるだけ予防の仕組みが社会の中でうまく機能し、できるだけ長い間自立した生活を、自分の意志で、自分のライフスタイルに合わせて送ることができる、そして、もしも介護が必要になった場合には、できるだけそれが早く発見されること、そして適切な介護を受けられること、どこの国でも、介護者の主な役割は家族が担っているところで共通しておりましたけれども、その家族にとっ

でも、だれかひとりにその負担が集中するのではなくて、できるだけたくさんの組織やサービスやらのパートナーシップによって、家族介護者の負担が軽減されること、そして介護の専門家のトレーニングは適切に行われて、その質が高まっていくこと、というようなことだったろうと思います。そして、それをさらに制度・仕組み的なところで見れば、このような人びとのニーズがうまく政策に反映し、そしてそれが社会全体の仕組みの中でバランスよく調和され、財源も同じように社会全体の中でバランスよく配分されていく、というのがその制度・仕組みから見たケアのあり方、というようなことで、共通のものが語られていたかと思います。そして、個人と社会の両方をつなぐものとして、そこに、先ほど山崎課長からもお話がありましたけれども、多様な住まい方の試みですとか、あるいは介護者をサポートするようなさまざまな仕組み、このようなものがその両者をつなぐところに、さまざま試みが実践されることによって、それぞれの持つ介護の力がより発揮されていく、ということ、で、こういうようなことに向かって、各国それぞれの社会状況の中で日々試行錯誤が重ねられており、一定の成果を収め、そしてなお、まだその人口高齢化に向かって、各国ともさまざまな課題を残している、というようなことだったろうかと思います。

本来であれば、ここでフロアの皆様からご質問をたくさん受けたいところなのですが、時間の都合がありますので、たいへん申し訳ありません、質問を3つまで受けさせていただきます、そしてパネリストの方にお答えいただき、最後にパネリストの方おひとりおひとりに、それぞれの国の状況を踏まえて、あるいは今日のディスカッションを踏まえて、それぞれが一番重要だと思っている、これからのチャレンジについて一言お話をいただきまして、今日のシンポジウムをまとめていきたいというふうに思っております。ご質問のある方、お手をお挙げいただきまして、近くのマイクまで出ていただきまして、お名前・ご所属をお話しいただいて、ご質問をいただきたいと思っております。いかがでしょうか。

(会場参加者)

兵庫県の、家族の会会員の染田と申します。ドクター・ペレイラに、Grandparents 協会について伺いたいと思っております。

(ロジー・ペレイラ・アリサ)

Grandparents 協会、これは13年前に設立されました。非常に健康で生産的な加齢を目指して、ということなのです。生産性と言いましたけれども、これは人びとが何かをやってお金をもらえるようにしましょう、ということなのです。高齢者の、しかしながら、生産性は、必ずしも給与をもらうということではないと思うんですね。心と体をいつも何かやれるようにしておく、何かやることを持っているということ、そうすることで障害を持たないようにしましょう、ということなのです。廃用症候群にならないように使っていれば、それは廃用症候群にはなりません。健康であるためには、心も体も健康であるためには、体を使わなければいけないということで、Grandparents 協会、これはまずですね、週3回の運動のクラスをやっています。それから、健康増進のプログラムもやっております。これは月1回なのですが、もっとも重要な疾病についての話し合いをします。加齢に伴う疾病です。13年やってまいりまして、さらに強化をしています。

今は国際長寿センターの方も3年になりましたけれども、国際長寿センターができてまた新しい視点が加わりました。その中で研究・調査も深めていきたいと思っております。

(工藤)

ほかに質問がありますでしょうか。

お願いします。

(会場参加者)

私は韓国から来ました、キム・オクナと申します。社会福祉法人の経営者で、ホスピス・ボランティアの養成を主にしておる者でございます。今、日本における高齢者介護の方向性に対してのお話を聞いているうちに、山崎課長の「尊厳保持」という言葉がとても感動的でした。それをもっと具体的に、どのような方法で、人間の尊厳を保持したいと思っていますか。



(工藤)

山崎さん、お願い致します。

(山崎史郎)

はい。痴呆ケアの中心というのは、「尊厳」だと思います。それをどのように確保するかというのは、いろいろなことが必要になります。例えばケアの世界においては、これまでの身体ケアと違って、その方々の、その痴呆のお年寄りの生活そのものを支える、もっと言いますと人生を支える、そういうような仕組みが必要だと思っています。ケアというのは、細切れで提供されているケースがございますが、むしろ、「尊厳」を維持するためにはある程度、初期の段階から、最終的なターミナルの段階まで、いわば人生を一緒にですね、ケアをする、伴走する、と我々言っております、一緒に走っていく、そういうような本当に包括的で継続的なケアが必要だろうと、こう考えています。そして、先ほど申しあげましたが、実は、最大の問題点はやはり「権利」の問題になります。虐待という問題は、本当に不幸な問題になりますが、これを、たいへん難しい問題ですけれども、次の新しいテーマとして、どのようにして高齢者ご自身が最後まで、その人らしく、本当に生活できるかと、そのための権利をいかに保全するか、これがテーマになると思っています。したがって、介護ということばからですね、大幅に変わっていくだろう、生活全般を支援していくような、そういう仕組みというものをやはりつくっていくことが必要だと思っています。

(工藤)

ありがとうございました。では、もうお一方、最後の質問になります。たいへん申し訳ないですが、では、お願い致します。

(会場参加者)

鎌倉の痴呆高齢者の家族会から参りました、小宮と申します。皆様お話ありがとうございました。福祉オンブズマンということについて、お尋ねしたいと思います。家族として、在宅で介護したり、それから手に余って、施設に入所させたり、いろいろ苦勞しておりますけれども、まだまだ施設の内容というものはたいへんばらつきがあります。それで、福祉オンブズマンの法制的な確立を、たいへん強く願うものですが、それぞれの国でそういったものが確立しているかどうか、お聞かせいただければと思います。

(工藤)

それでは、今の質問につきまして、アメリカの状況をノーラさんから、フランスの状況をフォレットさんから一言ずつお答えいただけますか。

(ノーラ・オブライエン)

質問どうもありがとうございます。アメリカでは、オンブズマンのプログラムがあります。一つはナーシング・ホームを対象にしています。これはオンブズ・プログラム、ナーシング・ホームのオンブズ・プログラムと呼んでいます。もう一つはですね、高齢者の権利擁護をするアドボケートということで、地域社会で家族と連携をしながら、そして高齢者と連携をしながら、高齢者のケア、これは地域プログラムとナーシング・ホーム、それからですね、政府に対して政策の変更・改善を求めるという働きかけをしています。

(フランソワーズ・フォレット)

フランスでも同じような動きがあります。施設についてはあるのですが、ただ十分な数がないのですね。すべての求めに応えるために、家族や患者の声に応えるだけの数がない。時には、虐待という問題が施設で起きていることもあります。また、家族内での虐待もあります。なぜかと言いますと、こういったオンブズマンとして、もしくはオンブズパーソンとして働く人の数が少ないからなのです。制度はあるんです、でも十分な数とお金の配分がなされていないということで、必ずしもすべての人のニーズに応えられているわけではありません。

(工藤)

英国での状況はいかがですか、ミスター・レイコック。

(ピーター・レイコック)

英国でもやはり、オンブズマンのサービスというものはございます。ここは主として、オンブズマンはよくない施設だとか、よくないサービスとか、それに目を向けるということ、それから、ちゃんと政策が正しい方向になっているかどうか、そして問題のある人のところにちゃんと行けているかどうかということで、公的なお金が導入されていまして、利用者はお金を支払う必要はありません。同時に、アドボカシーのサービスもかなり強力に進めていまして、全体で実施されています。さまざまな組織がアドボカシーの仕事をしています。特に、英国におきましては”Age Concern”という組織があります。非常にアクティブな、高齢者のアドボカシーとして、権利擁護の仕事をしています。特に虐待、これは身体的な虐待だけではなくて、金銭的な虐待についても取り組みをしている、それから高齢者、そして痴呆の人がですね、社会の隅に押しやられないように、という働きをしています。

(工藤)

ありがとうございました。それでは、そろそろシンポジウムも時間になりましたので、皆様に一言ずつ、皆様のお考えになる一番重要な、これから解決していく課題についてコメントをいただき、一言ずつ発表いただきまして、このシンポジウムの結びとしたいと思います。

ご発表の順に、ノーラ・オブライエンさんからお願い致します。



(ノーラ・オブライエン)

ありがとうございます。一番大きな課題として私が感じているのは、これはドクター・バトラーも同意見だと思うのですが、アメリカでは、また世界全体で言えることは、「年齢差別」です。これは広範に見られる共通の問題です。そして微妙な形であらわれるときもあるわけですが、はっきりとした形であらわれてこないときもあります。また、雇用慣行の中で、あるいは高齢者向けの政策の中でも、あるいはメディケアでさえ、これは高齢者を対象としてつくられたものであるにもかかわらず、十分ではないと、そして変更が加えられていないということです。やはり、高齢者にとって必要なことが、すべて十分に考えられていないということです。ベビーブーマーがこれから高齢化していく中で、もっとこういった必要なところを変えていければと思っておりますけれども、ドクター・バトラーがスピーチの中で言っておりましたように、それはベビーブーマーの世代には間に合わないかもしれないという危惧があります。

(工藤)

ありがとうございました。ドクター・フランソワーズ・フォレット、お願い致します。

(フランソワーズ・フォレット)

ありがとうございます。私もまた、こういった「年齢差別」に対抗するというのが大きな課題だと思います。しかし、そのたたかいにおいてはやはり、年をとることは素晴らしいことだという意識に変えていかなければいけないと思います。先進国しか今はその喜びを感じる事ができないと思うわけですが、ひとりひとり、我々のような者がやはり長く、生産的に生きることができるとの喜びを発信していかなければいけないと思います。私は「予防」を強く信奉する者です。加齢に伴う疾患というのは、多く予防できるものがあります。そして、さまざまな能力を持ち寄ることによって、予防を進めていかなければいけませんけれども、それと同時に、常に、少ない人たちはやはり障害を抱えていくということにもなるわけです。力

点は「尊厳」に置かれるべきであると、障害を持つ人の尊厳に置かれるべきであるということ、それは生涯においての我々の希望であると思います。

(工藤)

ありがとうございました。ピーター・レイコックさん、一言お願い致します。

(ピーター・レイコック)

米国、そしてフランスの同僚が言いました通り、やはり英国でもこの「年齢差別」というのは大きな問題になっております。したがって、我々にとって大きな挑戦課題というのは、医療従事者と致しまして、専門家として、年をとることを否定するのではなくて、むしろ賞賛していくことではないかと思えます。そして、政策にもそれを反映していくことが必要だと思えます。私が所属する世代というのはベビーブーマーであるわけですが、我々は、何もしないということをそのまま受け止める世代ではありません。やはり、行動する世代であると思っておりますので、我々が年をとっていくにつれて、そういった年齢差別を打破していくという努力はすると思えます。それと、成功するかどうかはわかりませんが、教育は重要です。

(工藤)

ありがとうございました。ドクター・ロジー・ペレイラ、お願い致します。

(ロジー・ペレイラ・アリサ)

同僚の方々と全く同意見です。「年齢差別」というのは、やはり我々の国のようなところでは非常に顕著に見られます。二つの点で対応していかなければなりません。第一に、高齢者の間の団体・協会をつくっていくということ、あるいは連携をはかっていくということが重要だと思えます。声を集めて、大きく発言していくということが重要だと思えます。そして2つ目としましては、年を取ることにに対する見方を変えていかなければいけない、年をとるということが、メディアの中で今言われているようなイメージとは違うものだという事です。また、政府に関しましても、我々のような若い国、60歳以上の人口が7パーセントとなっている若い国でありますので、政府にとっても、あまりこれは重点政策の1つになっておりません。しかし、多くの国はやはり、高齢化社会の経験を今、苦しみの中で感じているわけですが、長期の計画が必要だと思っております。

(工藤)

ありがとうございました。それでは最後に、山崎史郎さん、どうぞ。

(山崎史郎)

皆さんと全く同意見でございます。しかし、少し違う点を踏まえて、日本の独自の問題ということで、私がやりたいへん大きな課題と思っておりますのが、先程のプレゼンテーションでちょっと言いませんでしたけれども、これからの高齢化というのは我が国の場合はですね、都市部が中心になります。今から最も高齢化が進むのは、埼玉県であり神奈川県であり、大阪であり、都市部です。今、一番高齢化率が高い島根県というのは、今から高齢化は進みません。逆に言いますと、これから本当に、都市の高齢化を考える必要がある、そうなりますと我々のチャレンジは、コミュニティというものをもう一度どう作り直すか、ということになると思えます。残念ながら、このコミュニティ自体がですね、たいへん機能が落ちています。これを

どういふふうにあわせて、介護の問題の中でつくっていくか、日本のまちづくり自体の欠陥をですね、どう補えるかというところにあるのだと思います。そうなりますと住まいの問題、まちづくりの問題、そして皆のそれぞれの助け合いといったものをですね、どういふふうを考えていくか、そういうことが大きな課題になっていくかと思います。

(工藤)

ありがとうございました。それでは、これをもちまして、国際長寿センターのシンポジウム ”Who Cares?” を終わりにしたいと思います。アライアンスとして国際長寿センターは、これからも国際的なネットワークを中心に致しまして、高齢化社会の問題についてさまざまな研究および提言をしてみたいと思います。また皆様に、国際長寿センターとしてお目にかかれるときを楽しみにしております。どうもありがとうございました。